

「壁のむこうに男が座っている…」： ハルムスの散文における近代的理性の超克

小澤裕之

はじめに

本論文の目標は、ダニイル・ハルムス（1905-1942）の1930年前後の散文にみられる、近代的理性の超克というテーマの具体的様相を詳らかにすることである。

『モダンの五つの顔』によれば、17世紀以降の西欧では、日々高まるデカルト主義を背景に、哲学をはじめとする諸科学の分野で合理主義が重視されるようになったという。¹ 合理主義は、理性の発達や科学技術の進歩と連合して、「近代人」が「古代人」より優越していることを示す根拠とされた。このような「合理主義の優勢」は、哲学をはじめとする諸科学のほかに、詩学の分野でも着実に進行したという。

合理主義とは、百科事典が定義するように、「非合理的、偶然的なものを排し、理性的、論理的、必然的なものを尊重する立場」を指す。² 本論文では、近代以降に西欧で優勢になり、近代人の精神に固有のものとしてされたこの合理主義 *rationalism*（＝理性主義 *rationalism*）を、近代的理性と呼ぶことにする。

近代的理性の超克というテーマは、20世紀初頭の西洋芸術全般において顕著にみられた。それは特にアヴァンギャルド運動を通して先鋭化した。たとえば言語芸術において、そのことを如実に示しているのが、ロシア・アヴァンギャルド、とりわけロシア未来派におけるザーウミである。そもそも「заумь ザーウミ」とは、「за ум ザ・ウム」（理知／理性を超える）という言い回しを基にして造られた、「заумный язык ザウムヌイ・イズイク」（理知／理性を超えた言語）、すなわち理解不能の新造語全般を指示する記号である。³ ここで言われている理知／理性とは、より厳密に言えば、デカルトの心身二元論を背景に、17世紀以降の西欧で形成された「近代人」の近代的理性を指す。畢竟、ザーウミは近代的理性や近代人を超克するために選ばれた詩的手法なのである。

¹ 本段落の記述は、次の書籍に基づいている。マテイ・カリネスク（富山英俊・梅正行訳）『モダンの五つの顔』せりか書房、43-45頁。

² 伊藤勝彦「合理主義」『日本大百科全書9』小学館、1989年、67頁。

³ 小澤裕之『理知のむこう——ダニイル・ハルムスの手法と詩学』未知谷、2019年、54頁。

ザーウミに関する本格的な研究書を史上初めて著したヤネーチェクは、ザーウミの誕生した背景として、7つの要因を挙げている。(1) 心地よい音への着目 (2) 表出された言葉と思想／情動との齟齬 (3) 心理生理学への関心 (4) 子どもの喃語、言語習得、民話への着目 (5) グロソラリア(異言)への関心 (6) 言語哲学と言語学への関心 (7) 四次元、直観、キュビズムへの関心。⁴

7つすべてに共通しているのは、20世紀初頭に使用されていた、意味や内容に偏重している言葉に対する疑義である。ザーウミは合理的な意味より音を重視した語、意識下で思わず発せられてしまった語、靈感を受けて突発的に発せられた語などを手本とし、近代的人間には感知しえない四次元の世界との交信を図ろうとする。

ロシア未来派の影響下で文学活動を開始したハルムスも、近代的理性の超克を目指した。特に、本論文が扱う1930年前後の時期は、『報復 Месть』や『フニユ Хню』をはじめ、ザーウミを積極的に用いて詩作を行っており、近代的理性を乗り越えようとする志向性を、その創作から鮮明に読みとることができる。この点に関しては、拙著『理知のむこう』で詳述した。⁵ ただし、拙著ではもっぱら詩や劇詩を分析対象としたため、同時期の散文にはあまり言及できなかった。そこで、本論文では1930年前後の散文を取りあげ、近代的理性の超克というテーマが、彼の散文の中でどのように表現されているかを詳らかにしたい。

ハルムスは近代的理性を超克するため、散文において様々な手法を駆使した。その一つとして、〈壁〉というモチーフの利用が挙げられる。彼は自らの志向、嗜好、思想をある特徴的なモチーフに託して表現することが多かった。モチーフはしばしばグロテスクに強調され、奇怪なイメージを読者に惹起する。ヤムポリスキーが分析した〈窓〉〈転落〉〈消失〉〈球〉〈転倒〉〈連鎖〉といったモチーフは、その代表的な例である。⁶

興味深いことに、1930年前後のハルムスの散文においては、〈壁〉のモチーフが集中的に用いられている。⁷ 以下、〈壁〉が彼の散文で果たしている機能を一つ一つ詳らかに

⁴ Gerald Janacek, *Zaum: The Transrational Poetry of Russian Futurism* (San Diego and California: San Diego State UP, 1996), pp. 6-48.

⁵ 小澤裕之『理知のむこう』152-221頁。なお、本書はハルムスの全創作活動を「理知を超える」というザーウミの基本理念の下で捉え返した著作である。ここで言う「理知」とは、先述したように、本論文における近代的理性を指す。

⁶ Ямпольский М. Беспмятство как исток: Читая Хармса. М., 1998.

⁷ 〈壁〉と括弧付きで記すときは、それが実際の壁ではなく、壁のモチーフであることを示すことにする。以下同様。

にし、それがどのように近代的理性の超克というテーマに捧げられているか、具体的にみてゆこう。

1. 境界としての〈壁〉

古今東西を問わず、〈壁〉は極めてシンボリックな形象であり、その解釈も様々である。たとえば1994年にモスクワで翻訳出版されたシンボル事典では、それは日常的次元からの超越、入場や接近の制限、防衛、都市や国家、女性性、物質性などの性質を象徴しているとされる。⁸ また、2006年にモスクワとハリコフで出版されたシンボル事典では、入場や接近の制限、謎、境界、防衛などの性質を象徴しているとされる。⁹ このように、〈壁〉は文脈や見る者の立場に応じて、様々な性質を象徴するようになる。このとき、〈壁〉はその都度、それぞれの性質を象徴するという機能を果たす、と言うことができる。

これから分析するハルムスの散文においても、基本的に、〈壁〉はそれぞれ異なる機能を果たしている。本論文の趣旨に照らし、近代的理性の超克という文脈から個々の〈壁〉を捉えれば、それは次の三つの機能を果たしていることが分かる。一つ目は、日常と非日常を隔てる機能（境界としての機能）。二つ目は、近代的理性の象徴としての機能。三つ目は、脱近代的理性の象徴としての機能。なお、本論文において〈壁〉は、必ずしも巨大な人工物を意味しない。自由な交通を妨げる障害物全般を指すものとする。

まずは、第一の機能をもつ散文を見てみよう。下に全文引用するのは、1931年6月に書かれた短いテキストである。

実に奇妙なことに、言いようがないほど実に奇妙なことに、壁のむこうで、まさにこの壁のむこうで、男が赤い長靴を履いた長い足を伸ばし、怒った顔をして床に座っている。

壁に穴を開け、それを覗きさえすればすぐに、この怒っている男の座っているのが見えるだろう。

⁸ Керлот Х. Э. Словарь символов / Пер. Н. А. Богун и др. М., 1994. С. 494.

⁹ Шейнина Е. Я. Энциклопедия символов. М., Харьков, 2006. С. 467-469.

しかし彼について考えるには及ばない。彼は何なのだ？ 彼は想像上の空虚から私達のもとへ飛んできた、死せる生のわずかな一部ではないのではないか？ 彼が誰であれ、そのまま放っておこう。(2, 26) ¹⁰

「私たち」の世界と「私たち」に計り知れない世界とを、壁が隔てている。「壁のむこう」には男がいるが、正体は分からない。「彼について考えるには及ばない」ため、分からず仕舞いで放置される。

この散文は、「私たち」に理解されうるものと、理解されえないものがある、という二分法の上に構築されていると考えることができる。ハルムスは後者を指し示しはするが、深く追求しない。理解されえないものの存在を仄めかすだけだ。このような彼の姿勢は、1930年代以降の創作に一貫している。

しかし、ハルムスの散文において、「私たち」に理解されえない世界が、理解されうる世界と〈壁〉によって常に仕切られているとは限らない。仮に仕切られていたとしても、上の散文のように、「壁に穴を開け、それを覗く」ことができる。あまつさえ、次節で見るように、一方の世界が他方の世界からの侵入を許すことさえ、ままある。そのとき、〈壁〉は境界としての機能を失い、近代的理性を象徴するという、新たな機能を獲得するだろう。そのような〈壁〉の登場する散文において、〈壁〉は突破されるべき対象として位置づけられている。また、そこでは近代的理性が、論理性および規範的言い回しの転覆という手段によっても、突破されようとしている。

2. 近代的理性の象徴としての〈壁〉

2-1. 壁抜けによる近代的理性の突破

1929-1930年頃に書かれたと思しきある未完稿には、〈壁〉の変奏とみられる二つの自然物が登場する。一つ目は、丘である。興味深いことに、この丘は空を飛び、そして、通り抜けられる。

丘に吹きつける風は丘の進路を妨害することなく、丘のなかを通り抜けていった。ケイ素質の丘がまるで自らの不透過性を失ったかのようにだった。たとえば、コクマルガラスが丘のなかを通り抜けていった。雲のなかを通り抜けるみたいに。(2, 371)

¹⁰ ハルムス全集から引用する際は、(巻数、頁数)と記す。*Хармс Д. И. Полное собрание сочинений. В 6 томах. СПб., 1997-2002.*

ある男の家に人びとが集まっている。そこで披露されているのが、「風」や「コクマルガラス」が「丘」を通り抜けるという、この不思議なエピソードだ。本来は「不透過」であるはずの丘を〈壁〉の変奏とみなせば、「風」や「コクマルガラス」は〈壁〉を通り抜けているといえるだろう。同様の例は、この未完稿の冒頭にもみられる。

一匹の蠅がそばを走っていた紳士の額にぶつかり、彼の頭を通り抜けて、後頭部から出ていった (2, 369)。

昆虫にとっては、人間の頭も自由な飛行を妨げる〈壁〉である。そうだとすれば、蠅はやはり〈壁〉を通り抜けている。言うまでもなく、壁抜けは超常的な現象である。¹¹ 本論文の趣旨に照らして換言すれば、近代的理性に背く現象である。また、人間の頭を理性のメタファーと解釈すれば、この〈壁〉が近代的理性の象徴として機能していることは、一層明白になるだろう。蠅は〈壁〉を突破することで、近代的理性の支配する世界をも突破するのだ。

だがこの未完稿において、壁抜けのモチーフにも劣らず興味深いのは、先に引用した丘抜けのエピソードが披露されている場所——ルンダダル家である。なぜなら、そこは「脱論理的連鎖法則の兆候 признаки законов алогической цепи」を研究する人びとが、日ごと集まる場所とされているからだ (2, 372)。¹²

この奇妙な会合に集う人びとは、ハルムス全集を編纂したサージンも指摘するように、ハルムスが「天然の思想家」と呼んでいた実在の人びとを想起させる (2, 484)。〈壁〉に託されたテーマとも関連する、この不思議な「思想家」たちについて、詳しく見てゆこう。

2-2. 論理性の転覆による近代的理性の突破

1920年代後半から1930年代前半にかけて、ハルムスが「天然の思想家 естественные мыслители」と呼び、¹³ 親しく交遊していたある種の奇人たちがいた。彼は友人パンテ

¹¹ 壁抜けについて詳しくは、次の論文を参照せよ。小澤裕之「壁を抜ける、壁を作る——オペリウ派ウラジーミロフとハルムスの創作について」『れにくさ』10号、2020年。これは、ハルムスの創作仲間ウラジーミロフの散文における壁抜けに着目し、ハルムスと比較しながら、彼の詩学の究明を図った論文である。

¹² 下線強調は引用者。以下同様。

¹³ 「天然の思想家」は拙著でも紹介している。小澤裕之『理知のむこう』299頁。

レーエフに宛てた手紙（1932年8月10日）の中で、自分が考察したすえに至った結論が「あまりに予想外」であるがゆえに、自分が「天然の思想家」に似てきた旨を誇らしげに報告している。「数に関する論文を二本書きあげたよ。すごく満足してる。[...]」そこで出した結論があまりに予想外なものだと分かったので、おかげでぼくは天然の思想家に随分似てきたよ」（4, 70）。

また、ハルムスの友人ペトロフは、回想記の中で、「天然の思想家」のことを以下のように説明している。彼によれば「狂気じみた人びと」だという彼らは、その思考の独自性や脱論理性において、ハルムスの関心を惹いた。

ここで、ダニイル・イワーノヴィチが「天然の思想家」と呼んでいた人びとについて数言を費やしておくべきだろう。

[...]

彼ら全員とも、ハルムスが高く評価していたその特質によって際立っていた——意見の独自性、先入観にとらわれず判断できる能力、旧来の伝統からの自由、考え方のある種の脱論理性、そして、ときに精神病によって思いがけず呼び醒まされる創造力。彼らはみな狂気じみた人びとだった。[...]

私が思うに、ハルムスを惹きつけていたのは、何よりも彼らの脱論理、もっと正確に言えば、独特の少しだけずらされた論理だった。¹⁴

「はじめに」で述べたように、近代的理性が論理性を重視するとすれば、脱論理的な思考は近代的理性を逸脱している。ハルムスが「天然の思想家」の脱論理に惹かれたのは、近代的理性を超克するためのヒントを彼らと与えてくれるかもしれないと、感じたからではないだろうか。

また、ペトロフは「天然の思想家」を一人一人回想しながら、ルンダリツェフ Рундальцев という人物に触れている。「無口で陰気なルンダリツェフのことを覚えている。[...] 彼はひと晩中ひと言も発せず、ただ重苦しい目つきで皆を眺め回していることができた」。¹⁵ この男の名前は、「脱論理的連鎖法則の兆候」研究会を催すルン

¹⁴ Александров А. Материалы о Данииле Хармсе и стихи его в фонде В. Н. Петрова // Ежегодник рукописного отдела Пушкинского Дома на 1990 год. СПб., 1993. С. 196-197. この回想記は、最近ロシアで出版された、同時代人の回想録集に載録されている。Петров В. Н. Воспоминания о Хармсе // Даниил Хармс глазами современников: Воспоминания. Дневники. Письма / Под ред. А. Л. Дмитренко, В. Н. Сажина. СПб., 2019. С. 376-388.

¹⁵ Александров. Материалы о Данииле Хармсе. С. 197.

ダダル Рундадар の名前を容易に喚起する。未完稿が、「天然の思想家」とハルムスが親しく交遊していたのと完全に同時期に書かれていることに鑑みれば、この研究会に集う人びとが、「天然の思想家」の一人を念頭に置いて書かれたと推測するのは、妥当なことだろう。

未完稿には、もう一人の「天然の思想家」バシーロフ¹⁶ の名前も仄めかされている。「マフを身につけた、正しくはマフではなく防寒頭巾を身につけた紳士」(2, 370) がそうだ。この明らかに不自然な形容は、まさに不自然であるという点によって、それが特殊な要因に動機づけられた言い回しであることを露呈している。ある単語が、音の近似性を頼りに、別の単語に呼び寄せられているようなのだ。第一に、マフ муфта は蠅 муха に。第二に、防寒頭巾 башлык はバシーロフ Башилов に。マフは、テキスト冒頭の蠅のイメージから連想された語であろうし、防寒頭巾は、直後の「脱論理的連鎖法則の兆候」研究会を介し、「天然の思想家」の一人であるバシーロフの名前から連想された語であろう。人の頭を通り抜けた蠅は、今度は音の上を飛び石のように渡ってマフに、そして防寒頭巾に変身するのである。

このように、ハルムスは未完稿に脱論理的思考をする「天然の思想家」たちを配することで、散文全体の基調が脱論理色の濃いものとなるよう、安排しているのだ。

2-3. 規範的言い回しの転覆による近代的理性の突破

「(蠅が) 頭を通り抜けた (муха) прошла сквозь его голову」(2, 369) という先の表現に改めて着目してみよう。この常ならざる現象を指示する表現は、「(考えが) 頭に浮かぶ приходит в голову (мысль)」という日常的な言い回しを変形させたものである。ハルムスが自ら手の内を明かしている。頭を蠅が通過したジェルニャチンという名の男が、それと気づかずに頭の違和感の原因について考え、途方に暮れた言葉——「まったく思い浮かばない ничего такого мне в голову не приходит」(2, 369) ——こそ、まさにその言い回しをなぞっている。「マフ」と「蠅」の関係に倣い、「蠅 муха」は「思考 мысль」に呼び寄せられたと考えることも可能だろう。

¹⁶ Там же. ハルムスが 1929-1930 年頃に書いた雑記帳の中にも、バシーロフの名前がみえる (5, 319)。ただし、そこで彼は「賢者たち Мудрецы」の一人とされている。1930 年 8 月 31 日の雑記帳には、「天然の思想家 естественные мыслители」と酷似した、「天然の賢者 естественных мудрецов」という言い回しがあることから (5, 375)、1929-1930 年頃の雑記帳に出てくる「賢者」は、「天然の思想家」と同義と考えてよいだろう。

このようにして、定型表現を僅かに、だが決定的に変化させ、予想外の意味を産出する手法は、ハルムスの常套的な詩作法である。その際、土台とした定型表現を、今回のように透かし見させることも、往々にしてある。

以上のように、〈壁〉が近代的理性の象徴として機能しているハルムスの散文において、近代的理性は壁抜け、脱論理的思考をする「天然の思想家」、そして規範的言い回しの転覆によって、超克されようとしている。

一方で、ハルムスのテキストには、〈壁〉が境界として機能するのでも近代的理性の象徴として機能するのでもなく、むしろ脱近代的理性の象徴として機能しているものがある。

3. 脱近代的理性の象徴としての〈壁〉

3-1. ピラミッド

頭の中を蠅が通過した男と同じ名前（ジェルニャチン）を授けられた人物が、ハルムスの書いたごく短い、断片的な散文にも登場する。興味深いのは、そこではピラミッドという巨大な〈壁〉が、都会の中央に建設されようとしている点だ。

有名なプレハリズィアスト¹⁷であるジェルニャチンという紳士が、ペテルブルグの中央に本物のピラミッドを建設することを決意した。第一に、屋根に座るよりこのピラミッドの上に座るほうがいいからであり、第二に、ピラミッドの中には就寝用の部屋も作れるからである。(2, 429)

ピラミッドに体现される古代エジプトのテーマは、ハルムスにおいて、近代的理性の超克という問題と直結する。彼にとって古代エジプトの意義とは何か、これから検討してゆこう。

1930年代前半のハルムスは、古代エジプトに対し、並々ならぬ関心を払っていた。それを傍証するものの一つが、彼の雑記帳におけるエジプト関連の記述の多さである。

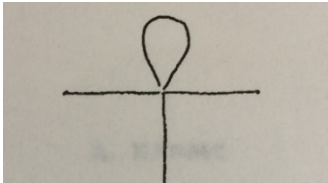
¹⁷ 「プレハリズィアスト плехаризиаст」の意味は不明。メイラフによれば、ハルムスの造語だという。Мейлах М. Даниил Хармс: последний петербургский "денди" (заметки к теме) // Хармс-авангард / Ред.-сост. К. Ичин. Белград, 2006. С. 20. また、前節の未完稿でも、ジェルニャチンはプレハリズィアストと称されている (2, 372)。

1931年には、古代エジプト神話に登場する神オシリスのモノグラムや、古代エジプトの十字架のスケッチもしている（図1上：オシリスのモノグラム、図1下：十字架）。¹⁸



(図1)

ちなみに、後期ハルムスの思想を追究する上で重要な手掛かりとなりうる、「これ」「妨害」「あれ」について書かれたエッセイ（1940）においても、¹⁹ 彼は古代エジプトの十字架を描いている（図2）。このことから、古代エジプトが彼の積年のテーマになっていることが窺えるだろう。



(図2)

ハルムスの古代エジプトへの関心は、「偉大な作家」（5,445）と彼が高く評価し、小説『カーKa』の舞台の一つとして古代エジプトを選んだ、ロシア未来派の詩人フレーブニコフを経由していると考えられる。²⁰ そのことを裏付けるように、ハルムスは『ラーパ Лапа』（1930）というテキストの中で、ナイル川に言及してアメンホテプを登場させたばかりか（1,132）、フレーブニコフという名の人物さえ登場させている。

ハルムスにおいて、古代エジプトのテーマがフレーブニコフという未来派詩人と深い繋がりをもっているのは、決して偶然ではない。本論文の「はじめに」で触れたように、ロシア未来派におけるザーウミの使用は、近代的理性を超越しようとする意志に支えられている。彼らにとって、理知／理性の超越（ザ・ウーム）は、理知／理性の無化を意味していない。彼らは近代的理性を否定しているのであって、理性や理知

¹⁸ Рисунки Хармса / Сост. Ю. С. Александров. СПб., 2006. С. 23. 写真は一部。撮影は筆者。次の図2の写真も同様に、撮影は筆者（4,37）。

¹⁹ このエッセイについては、次で詳しく解説している。小澤裕之『理知のむこう』270-282頁。

²⁰ Герасимова А., Никитаев А. (вступ. ст. и примеч.) Даниил Хармс: Лапа // Театр. 1991. № 11. С. 34 (перизд: Театр. 2019. № 37. С. 34). エジプトのテーマを軸に両者を比較した次の論文も参照せよ。Иванов Вяч. Вс. Египет амарнского периода у Хармса и у Хлебникова: «Лапа» и «Ка» // Столетие Даниила Хармса / Под научн. ред. А. А. Кобринского. СПб., 2005.

それ自体を否定しているのではないのだ。ロシア・アヴァンギャルドにおいて、近代的理性を超克しようとする志向が、初期にはプリミティヴィズムとなって現れ、とりわけ古代スラヴに多くの芸術家たちが惹きつけられたのは、²¹ そのことを示す最も典型的な事例といえる。ザーウミが幼児の舌足らずな発声や、宗教的恍惚感に捕えられた際に発せられるグロソラリアをときに模倣し、神秘思想家の提唱した四次元や直観といった反-近代的理性を養分としたのも、同じ志向の発露である。

1930年代のハルムスが古代エジプトに逢着したことも、近代的理性からは隔てられた新たな理性を探求しようとする、ロシア未来派と同様の志向から説明されるべきだろう。ヴァチェスラフ・イワーノフによれば、すでに1910年代には古代エジプト研究が世界的に進展し、当地の人びとが独自の高度な数学的知識を有していたことが、調査によって明らかになっていたという。²² 「天然の思想家」との交遊にも認められる、近代的理性を超克しようとするハルムスの志向は、古代エジプトに出口を求めたのである。

したがって、彼が自らの登場人物をして、ペテルブルグという近代都市の中央にピラミッドを建設させようとする意図は、明白である。ハルムスは近代を相対化し、そこからの脱却を図ろうとしているのだ。その意味で、ピラミッドは脱近代的理性の象徴として機能しているとみなすことができるだろう。

本論文の最後に、巨大な壁がピラミッドと同様の役割を担っている、別の散文を検討したい。この〈壁〉は一見すると近代的理性を象徴しているようにも映るが、すぐ明らかになるように、何重にもわたって脱近代的理性を象徴する機能を果たしている。

3-2. 「思想家の技師」の〈壁〉

1930年、ハルムスは、文字通りの意味での壁をめぐる、無題の散文を書いている。全文を引用する。

ある技師がペテルブルグを横断する巨大な煉瓦の壁を建設しようと目標を立てた。彼はどのように遂行すべきか考えを巡らせ、毎晩眠らずに検討を重ねる。思想家の技師たちの一団が次第に形成され、壁の建設計画が出来上がってゆく。壁は夜中に建設されること

²¹ 「ギレヤ＝立体未来派の運動を特徴づけるものの一つ」は、「スラヴ異教や民衆文化への関心に裏打ちされた原始主義的志向性であった」。亀山郁夫『甦るフレーブニコフ』平凡社、2009年、163頁。

²² *Иванов. Египет амарнского периода. С. 81.*

に決まる。それも、壁が皆にとってサプライズとなるよう、一晩ですべて完工してしまうように。作業員たちが招集される。担当を割り振られる。市当局は目を離している。この壁が建設される夜がついにやって来る。壁が建設されることは4人しか知らない。作業員と技師は誰がどこに立ち、何をすべきか、正確な指示を受けている。正確な計算のおかげで、壁は一晩で建設される。翌日ペテルブルグは大騒ぎだ。ところが当の壁の考案者はふさぎ込んでいる。この壁を何に役立てればいいのか、自分にも分からなかったのだ。(2, 19)

ここでは、壁は「思想家の技師たち мыслители-инженеры」の緻密な「計画」と「正確な計算のおかげで」完工している。したがって、一見すると、それは近代的理性の賜物に見える。「思想家 мыслители」と「技師 инженеры」という二つの単語を直列させた呼称「思想家の技師」も、素朴に考えれば、壁建設の発案者をはじめ、「毎晩眠らずに検討を重ね」た技師たちの思索的な傾向を如実に表しているのみなせるだろう。

だが、こうして建設された壁は、脱近代的理性を象徴する機能を果たしている。そのことは、次の三つの着眼点——散文の結末部への注目、他のテキストとの比較、ハルムスの交遊関係の参照——を通して確かめることができる。順番に見てゆこう。

結末部において、近代的理性によって建設されたはずの壁は、やがてその建設者の憂鬱の種となっている。なぜなら、出来上がった壁は無用の長物と化しているからである。「はじめに」で述べたように、近代的理性が偶然的なものを排し、必然的なものを尊重する立場をとる以上、役に立たないことが突如判明する壁は、近代的理性を裏切っていると言える。その意味で、それは脱近代的理性を象徴する機能をもっていると、みなすことができる。

第二に、サージンによれば、前項で引用したピラミッドの断片的文章は、壁建設テキストの真上に書きこまれており、後者を執筆する契機になった蓋然性が高いという(2, 428)。たしかに、両者はペテルブルグに巨大な建造物を作り出すという設定も共有している。ペテルブルグに実際に巨大な壁を建設した結果、その無用性にふさぎ込んでしまう「思想家の技師」は、ペテルブルグにピラミッドを建造しようと夢想するジェルニャチンの未来の姿といってよい。現実の執筆過程においても、内容においても、壁建設テキストが断片的文章の未来の姿だとすれば、双方の〈壁〉が同一の機能をもっているとみなすことは、理に適っている。つまり、ピラミッドが脱近代的理性を象徴する機能を果たしている以上、「思想家の技師」たちの建設した壁も、同様の機能を果たしていると、類推することができるのである。

第三に、やはりサージンが指摘するように、「思想家の技師 мыслители-инженеры」という呼称は、1930年前後にハルムスが交遊していた「天然の思想家 естественные мыслители」を明らかに反映している(2,429)。「思想家の技師」が、脱論理的な思考を特徴とする「天然の思想家」の謂いだとすれば、壁の建設について「考えを巡らせ、毎晩眠らずに検討を重ねる」思索そのものが、そもそも脱論理的な性格を有していたと、言えはしまいか。事実、それはたしかに「正確な計算」に基づいていたかもしれないが、目的のない無用物を生み出したという意味で非合理的な行為であり、通常の論理を著しく欠いていると言えるのである。

第一と第二の観点からみれば、出来上がった壁は脱近代的理性に紐づけられる。そして、第三の観点からみれば、壁の建設自体も脱近代的理性に紐づけられる。いずれにせよ、この散文における壁は、脱近代的理性の象徴として機能していると考えることができるだろう。

おわりに

本論文では、ハルムスの創作に一貫してみられる近代的理性の超克というテーマが、1930年前後の散文の中で、具体的にどのような形で表現されているかを詳らかにしてきた。そのための手掛かりとしたのが、〈壁〉というモチーフである。この時期に彼は〈壁〉が登場する散文を集中的に書いている。各散文における〈壁〉の機能は異なるものの、そのすべてが近代的理性の超克というテーマに捧げられている。

第一に、〈壁〉は日常と非日常を隔てる機能をもっている。境界としての機能を備えたこのような〈壁〉は、「壁のむこう」に近代的理性を超えた別の世界があることを示唆する。第二に、〈壁〉は近代的理性を象徴する機能をもっている。このとき、〈壁〉は突破されるべきものとして散文に登場する。また、その散文において、近代的理性は脱論理的思考をする「天然の思想家」、そして規範的言い回しの転覆によっても、乗り越えられようとしている。

第三に、〈壁〉は脱近代的理性を象徴する機能をもっている。たとえば、ある断片的散文で、〈壁〉はピラミッドとして表象されている。初期のロシア未来派が近代的理性を超克しようと試みる過程で、それとは異なる別個の理知／理性を有していると考えられた、古代スラヴに惹かれたように、ハルムスは古代エジプトに惹かれ、ピラミッドという古代エジプトのモチーフを選択したのである。さらに、別の散文では、〈壁〉は文字通り巨大な壁として表象されている。その壁は無用物であること、ピラミッドに準えるのが可能であることから、やはり脱近代的理性を象徴する機能を担っている

「壁のむこうに男が座っている…」

と考えることができる。また、壁を建設した「思想家の技師」を、脱論理的思考をする「天然の思想家」の謂いとみなせば、壁の建設を立案・計算した思考そのものが、脱論理的な性格を有していたと考えることもできるだろう。

概して、ハルムスは同一のモチーフを複数のテキストでくり返し使用する。〈壁〉というモチーフがそうだったように、原則として、そこには共通する志向が投影されている。極めて短いテキストばかりを量産した彼の詩学を追究するには、モチーフ分析は非常に効果的な手段となるだろう。ハルムスの詩学にとって重要なモチーフを見つけ、その思想的背景を解明することが、今後の課題である。

«За стеной, вот этой стеной, на полу сидит человек...»: преодоление современного ума в прозе Хармса

ОДЗАВА Хироюки

Даниил Хармс посвятил всю свою творческую жизнь теме преодоления современного ума. В своих стихах он подходит к этой теме, используя заумь, приём русского футуризма.

А в прозаических же произведениях – использует другие приемы. Одним из них является использование мотива «стены». С 1929 по 1931 год Хармс написал по крайней мере четыре прозы с этим мотивом. В них у «стены» есть три функции: (1) границы между повседневной и не-повседневной жизнью; (2) символа современного ума; (3) символа сверх-современного ума.

Во первой прозе Хармс намекает о существовании не-повседневного мира «за стеной». Во второй «стена» как символ современного ума представлена проницаемой. А в третьей «стена» как символ сверх-современного ума репрезентирована пирамидой. Хармс стремился к древнеегипетскому мотиву, преодолевая современный ум, как футуристы стремились к древнеславянской культуре. В четвертой «стена» с третьей функцией репрезентирована и бесполезной вещью, которая противоречит современному

小澤 裕之

уму. Кроме того, можно считать, что эту стену построили «естественные мыслители», алогическая мысль которых интересовала писателя при жизни.

Итак, мы выясняем, что в прозаических произведениях Хармса на рубеже 1920 гг. и 1930 гг. его тема преодоления современного ума выражена с помощью мотива «стены».